

低開発の記憶—メモリアス—

2007(平成19)年7月20日鑑賞<松竹試写室>

★★★★



監督=トマス・グティエレス・アレア/出演=セルヒオ・コリエリ/ディジー・グラナドス
/エスリンダ・ヌエス (Action Inc. 配給/1968年キューバ映画/97分)

……はじめて見たキューバ映画の時代設定は1961年。1959年のカストロによるキューバ革命の2年後だ。そんな時代状況の中、ブルジョア階級の主人公が、アメリカに亡命せずキューバに残ったのは一体なぜ……？ 革命か反革命かで割り切れない、どっちつかずの中年男の人間味が面白いが、彼の思惑とは別に、時代は確実に変化していくもの。「低開発」とは発展途上国という意味だが、この言葉の意味をよくかみしめながら、この激動の時代のキューバで生きた人間臭い主人公の生きざまをじっくり考えてみよう……。

はじめて観たキューバ映画！

この映画は、邦題を見ただけでは何の映画かサッパリわからない。「乱開発」とか「高度成長」とかの日本語はよくわかるが、そもそも「低開発」という言葉自体に大きな違和感があると同時に、ホントに「そんな日本語があるの？」という疑問も。そこで調べてみると、この映画の英語タイトルは『Memories of Underdevelopment』。

この「Underdevelopment」を研究社の『新英和中辞典』で調べてみると、「underdeveloped」について、①発達不十分の、発育不全の、②(国・地域など)低開発の、十分開発されていない：underdeveloped countries 低開発国、後進国(比較：developing country 発展途上国を用いる方が一般的)とある。他方、三省堂の『国語辞典』には、「低開発」について、経済の進み方が遅れ、生活程度が低いこと。「低開発国」=発展途上国とある。したがって、日本の経済用語として「低開発」という言葉はあるようだが、やはりどちらかというとな「発展途上」の方がベターなのでは……？

もっとも、ネットの「Yahoo! 検索」を調べてみると、「昭和30年版 低開発における開発の進展」や「低開発国における開発の進展と車両輸出」など「低開発」という言葉のオンパレードがあり、さらに「低開発地域工業開発」という言葉もたくさんあるから、やはり「低開発」という言葉はメジャーなのかも……？

1961年のキューバ情勢は……？

この映画は、私が大学に入学した1967年の翌年1968年につくられたもの。この時代は都市計画法を核とした日本の近代都市法が確立した時代だが、学生運動に明け暮れていた当時の私には、1959年のキューバ革命に大いなる興味があった。大学内でもカストロ政権の議論が盛んだったし、ゲバラのカッコ良さに憧れたもの。

この映画は1961年のキューバのハバナが舞台だから、一瞬これはキューバ革命を描いた映画かと思ったが、それは全く見間違い。この映画は、革命直後の1961年という緊迫した情勢の中で、38歳のブルジョア階級の主人公セルヒオ・カモーナ・メンドーヨ（セルヒオ・コリエリ）の、いかにも「人間臭い」生き方を描いたもの。

1962年10月には、ソ連がキューバに中距離ミサイル基地を建設していることがアメリカに発見されたため一触即発の情勢となり、核戦争の危機が現実味を帯びることに。その様子は『13デイズ』（00年）で詳しく描かれているが、ケネディ大統領は「キューバへ向かう船舶の臨検を行う」と宣言し、他方カストロは「祖国か死」と演説をぶったところで緊張は最高潮に達した。そんな軍事的に緊迫した情勢下、主人公セルヒオはキューバの中で一体どんな生活を……？

次々と脱出していく中で……

1959年にキューバ革命を成功させたカストロ政権は、1961年に農地改革を実施し、企業の国有化を進めていった。こんな社会主義国家への移行を進めるキューバに対して、アメリカが国交を断絶したのは当然。そんな中、カストロは1961年4月17日、社会主義革命を宣言した。

それまでキューバは自由主義陣営に属していたから、いわゆるブルジョアジー＝資本家階級が存在していたが、社会主義革命宣言によって真っ先にとぼちりを受けるのは彼らブルジョアジー。したがって、ブルジョア階級は先を争って自由な国アメリカへの亡命を始めたから、家主階級に属し、賃料収入で食っているセルヒオも、立場

上の危険を感じて亡命するのが通常の道。ところがセルヒオは、ちょっと扱いに窮していた妻だけをアメリカに亡命させて、自分1人はキューバに残ることに。もちろん、セルヒオの友人のAさんもBさんも次々と亡命……。そんな情勢の中、彼は一体何のために、何を求めてキューバに残ったの……？

なぜ彼はキューバに……？

ニヒルで虚無的な人生観をもつセルヒオが、なぜ亡命せずキューバに残ったのか……？ それは、彼が革命という理想に対して夢をもって同化することができず、そうかといって反革命のために闘う意義も見い出せなかったため……。さらに彼は、自分がブルジョア階級に属していることを認識しつつ、その特権を使いこなそうという意欲もなく、逆に自分がそんな階級に属していることについて居心地の悪さと罪悪感を感じている状態。

そんな彼だから、キューバに残っても何をするという目的があるわけもないのは当然で、当面は情勢の展開を見守っていただけ。しかして彼ができることは、フラフラとハバナのまちを歩きながら、ガールハントをすることくらい……。？

目的はガールハント……？

セルヒオは不動産を所有しており、その賃料収入で十分生活していくことができるという家主階級に属していた。ところが、近い将来彼の不動産は国家によって没収される運命に……。しかし、今は何もしなくても生活できるセルヒオは、ストーカーのように自分の住む高級マンションから望遠鏡で高級ホテルのプールサイドに寝そべる女性やまちを眺めるのが趣味であり、唯一の仕事……。？

これによって、キューバ革命にもかかわらず、実は「何も変わっていない」ことを確認しながら、彼は以前と同じようにまちを歩き、女性に声をかけていた。しかし実は、まちは、そして社会情勢は、彼が認識しないうちに大きく変わっていた。しかし、セルヒオはそれを自覚できないまま、ある日女優志望の美しい娘エレナ（デージー・グラナドス）と出会うことに……。

よくもまあ、あの時代のキューバでこんな映画が……

21世紀を迎え、平和で豊かな時代を楽しんでいる中でなら、ガールハントを楽しむ

生活もわからないではないが、キューバ革命直後の1961～62年という時代状況において、キューバの中で16歳の女優志望の娘エレーナを38歳の主人公セルヒオが自宅に連れ込んで肉体関係をもつというのは、それだけですごい話。映画は、セルヒオがエレーナを言葉巧みに自宅に誘い込み、あくまで納得と合意の上で肉体関係に至る様子を描写していく。そして、理想主義者なのか現実主義者なのかよくわからないセルヒオが、前の妻と同じように「低開発国」の娘エレーナをヨーロッパ流の洗練されたレディに育て上げようと努力する姿を描写していく。

そんな夢を抱いていたセルヒオが、結局エレーナを見限り、離れようとしたのはある意味やむをえないこと。しかし、まさかそれがエレーナからの強姦罪による告訴に結びつき、言われもない刑事裁判を受けざるをえない結果になろうとは……？ この裁判の推移を見ていると、エレーナやエレーナの両親の言い分どおりに、セルヒオが強姦罪で有罪となる可能性も十分に考えられるものだったが、判決はラッキーな結果に……？ しかし、「すわ、核戦争勃発か！」と世界中が騒いでいた1962年に、キューバに残ったセルヒオがこんなくだらない(?) 裁判闘争に取り組んでいたとは……。よくもまあ、あの時代のキューバでこんな映画が……？

これは、ラテンアメリカ映画伝説の名作！

この映画を監督したのは、1928年にハバナに生まれたトマス・グティエレス・アレア。彼は1960年に初の長編フィクション『革命の歴史』を撮り、その後1993年の『苺とチョコレート』でアカデミー賞外国映画賞にノミネートされ、1996年の『グアンタナメラ』上映から数週間後に亡くなったとのこと。

そんなトマス・グティエレス・アレア監督の1968年の作品『低開発の記憶—メモリアス—』が今回日本で上映されることになったのは、2004年、キューバ映画の名作を残そうとキューバ映画芸術産業庁(ICAIC)がデジタル化に踏み切り、2006年12月7日公式に制作完成の発表がなされたため。すなわち、その18本のうちの1本が「ラテンアメリカ映画伝説の名作」と言われる本作というわけだ。

そんなこんなの諸事情の中、この映画は今回がはじめての一般公開になるとのこと。そんなラテンアメリカ映画伝説の名作を見逃す手はない、と私は思うのだが……。

2007(平成19)年7月21日記